

2023年3月24日

2023年3月19日(日)に、久しぶりに対面による支部例会が東京未来大学で開催されました。今回の発表も素晴らしい発表で、分野はそれぞれ違うものの、研究の手法や考え方など大変参考になった例会であった。また対面ということで支部会員の元気なお姿を見ることができ大変うれしく思っております。以下に、発表者の要旨を掲載いたします。

日本比較文化学会 第 58 回 関東支部例会 発表要旨 (於、東京未来大学)

## O.ヘンリー短編集に見るニューヨーク観

東海大学湘南校舎准教授

高橋 強

O. Henry は 20 世紀初期にアメリカで活躍した短編小説家であり、1903 年『ニューヨーク・ワールド』紙と 1 編 100 ドル、1 週 1 編の契約を結んでから 3 年間驚異的な活躍をするといったように短期間で数百もの短編小説を世の中に送り出した。いくつかの作品は現代においても人々に広く傑作として知られている。作品はニューヨークを舞台としたものが多く、彼の作品集の大きなテーマになっている。またユーモアに満ちた巧妙な手法を用いて作品を書き、意外な結末に終わる作品の展開さらには独特の文体で 272 の作品、13 編の作品集を残した。過労と飲酒のため 1910 年 6 月 5 日に 47 歳で死去している。代表作の一つであり、ニューヨークの庶民生活の哀歓を描いた『四百万』The Four Million (1906) は当時のニューヨークの人口を表したものである。彼は都市部に住んでいる人々に焦点をあてた作品を多く書いている。作品に登場する人々は財政面や社会的な面で何らかの苦難を抱えており、O. Henry は都市に住んでいる人々に共感を持っていたようである。彼のよく知られている小説の構成として "surprise ending" が挙げられる。それは序盤では明かされない情報が結末で読者を驚かせるものである。本発表の目的は、O. Henry の作品を分析することで、彼の短編小説の魅力がどのようなものなのかを明確にすることである。彼は、本名をウィリアム・シドニー・ポーター William Sydney Porter といい 25 歳のとき 19 歳の女性と結婚。そのころから文筆生活で生計を立てようとし、週刊新聞『ローリング・

ストーン』を発刊するがたちまち失敗し生活苦に陥る。また 1896 年には以前働いていた銀行から横領罪で告訴され、彼はホンジュラスまでへ逃亡するが、妻の危篤を知って 1898 年帰国して自首し、横領罪で 5 年の刑を受ける。この間にこれまでの体験を基に短編小説を書き始め、オー・ヘンリーの筆名で 1899 年『マクレアズ』誌に作品を発表し、これが縁で、ニューヨークに出て作家生活に入り、一躍注目を集める。

彼の短編小説は、生涯に移り住んだ各地を反映して、アメリカ南部、西部、ラテンアメリカ、ニューヨークと四つに分けられる。とくに日ごと夜ごとニューヨークの街を彷徨(ほうこう)しながら、驚くべき多産ぶりを発揮した。そのほとんどがニューヨークものである。脂のりきった時期の作品ということもあるが、まだ馬車や市街電車の走っていたニューヨークを舞台に、庶民や移民たちの姿が生き生きと描かれ、ユーモアとウィットをきかせた筆致のなかから一種のペーソスが漂ってくる。なかでも、前述した当時のニューヨークの人口数を題名にした作品集『四百万』The Four Million (1906) に傑作が多いが、本研究発表では、賢者の贈り物 The Gift of the Magi、二十年後 After Twenty Years、警官と賛美歌 The Cop and the Anthem、最後の一葉 The Last Leaf といった作品に出てくるニューヨーク観についても述べ、考察を深めることとする。

#### 高等学校の応援団員の役割及び活動におけるモチベーションの要因に関する考察

金塚基 東京未来大学准教授  
岩崎智史 東京未来大学講師

本報告は、グローバル化する近年の社会状況のなか、日本の文化的な独自性が強くみられるものとして、研究・考察の対象とされつつある学校の応援団の応援活動に対するモチベーションを支えていると考えられる要因について、高等学校の応援団の生徒を対象として実施したアンケート調査の結果から知見を得ることを目的とする。

高等学校教育における応援団の役割活動の考察から、応援団生徒の個々のモチベーションのあり方に影響を与えていると考えられる動機づけの要因として、学校における生徒集団としてのアイデンティティの状態、さらに、学校のみならず地域を介在した「郷土」集団に対するアイデンティティのあり方を動機づけの要因と仮定した。そして、それらの要因について集団アイデンティティを測定するための尺度を用いたアンケート調査を作成し、8つの高等学校の応援団の高等学校生を対象として実施・回収した。

統計分析の結果、全体の回答の因子分析から「生徒アイデンティティ」「郷土アイデンティティ」「学校アイデンティティ」の3つが抽出された。また、それぞれの因子間で一定の相関がみられ、それぞれが独立しているわけではなく、互いに影響し合っていることがわかった。

さらに、応援活動に対する動機づけの記述回答に KJ 法を用いた結果から最も多かったものとして、他者に対する「奉仕」に対するやりがい、次に、仲間との「人間関係」が挙げられた。

カンボジア人日本語学習者における尊敬語と謙譲語の学習上の問題点

— 『みんなの日本語初級Ⅱ』と『できる日本語』をもとに —

HEM SETHAI 宇都宮大学博士後期課程

文化庁(2007)以降、日本語の敬語は5分類が行われているが、現時点では、小中学校の国語教育では謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱの区別が困難だという理由で、小中学校の国語科教育では、3または4分類が採用されている(野呂2016)。外国人向けの主要な教科書であり、カンボジアでもさかんに使われているスリーエーネットワーク(2013)とできる日本語教材開発プロジェクト(2012)も従来の3分類のままである。本研究は、まずこのことがどのように学習者の敬語能力獲得をさまたげるかを論じる。

さらに本研究は、上記の2つの教科書で学習項目とされている敬語の内容を検討するとともに、これらの教科書を使用して学ぶカンボジア人日本語学習者の学習方法にどのような特徴があるかを聞き取り調査した。また、学習者対象の質問紙調査にもとづき、2つの教科書の使用で実際に十分な学習がなされるのかを考察した。

その結果、教科書の内容以上のことが授業では教えられないこと、学習者は敬語を使う理由や、尊敬語、謙譲語、丁寧語の存在意義を理解しておらず、使い分けもできないことが明確になった。さらに、母語と異なり日本語が相対敬語の言語であることを理解するには、そのことが母語で説明される必要があると考えた。

以上をもとに、カンボジア人日本語学習者向けの母語版敬語新教材をどのように開発すべきかを論じた。

## 参考文献

1. スリーエーネットワーク(2013)『みんなの日本語初級Ⅱ第2版本冊』スリーエーネットワーク
2. できる日本語教材開発プロジェクト(2012)『できる日本語初中級本冊』嶋田和子監修アルク
3. 野呂健一 (2016)「日本語表現教科書から見る敬語指導の問題点」高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報,2,33-40.
4. 文化庁(2007)『敬語の指針』文化審議会答申([http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai\\_6/pdf/keigo\\_to](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_to))

[usin.pdf](#),2023年2月確認).

## 韓国の民間団体主導による「対北放送」

田中 則広 淑徳大学准教授

### 発表要旨

冷戦末期、西側諸国からの電波は、東欧の社会主義国の内部に変革をもたらし、民主化を求める人々に影響を与えながら、親ソビエト政権の崩壊にも一役買った。2023年の現在も、国際社会から変革を求められている国々に対して西側の主要国は電波を発射しているが、主要対象国のひとつに北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国がある。とりわけ、軍事境界線を挟んで対峙する韓国からは、公営放送、宗教放送、北韓離脱住民（いわゆる脱北者）や韓国の人権活動家が中心となって運営する民間放送など、多様な形態による「対北放送」、すなわち、北朝鮮住民に聴取させることで内部からの変革を目的とした宣伝放送が行われている。今回の報告では、進歩（革新）系の盧武鉉政権下の2000年代半ば、相次いで誕生した民間団体主導の対北放送3社（国民統一放送、自由北韓放送、北韓改革放送）を取り上げる。当時、北朝鮮に対する融和政策を続ける国の方針の下、北朝鮮に対する批判的な内容の自粛が目立つようになった公営放送の役割を、これらの民間放送が担うことになった経緯、また、放送目的や番組編成にみる各社の特色、そして、新型コロナウイルスが番組制作などに与えた影響について、2023年2月に実施した関係者へのインタビューを交えながら報告する。

### 新聞からみる近代日中コーヒー文化の普及状況

－『読売新聞』、『朝日新聞』、『申報』を中心に

邱 月 上智大学大学院博士後期課程

#### 【問題の所在と先行研究の再検討】:

今日、珈琲店、カフェ、コーヒー・ショップ、喫茶店など、様々なタイプのコーヒー店が世の中に存在している。このような公共空間で、人々はコーヒーを飲んだり、会話をしたり、仕事及びビジネスをしたり、コーヒー店も現代生活に様々な役割を果たしている。しかし、東洋において、舶来品であるコーヒー及びその文化の受容、発展、普及、変容などの諸問題については、まだ不明確なところが多い。そのため、本研究は、コーヒー文化の発展時期まで遡る。

先行研究では、日本において、新聞のような一次資料をめぐり、コーヒー文化に関わる先行研究は少なくはない。ただ、主にコーヒー文化の起源、特定の喫茶店の経営状況の調査、特

定のコーヒーメーカーの販売実態、もしくはそのメーカーのみの関連広告などを注目しているという傾向と見られている。調査対象を特定の一紙のみに絞って調査や、時間軸に沿って普及プロセスを明確化し、さらに同時代の他の資料を横断的に比較する研究は多くない。一方、中国において、新聞のような一次資料をめぐり、コーヒー文化に関わる先行研究はほぼ空白という状況である。さらに、隣国である日中において、近代西洋文化のシンボルである新たなコーヒー文化をめぐる比較文化はほぼ空白である。

**【研究目的（期待された結論）】：**

以上の状況を踏まえ、本研究では、コーヒー文化の発展初期と思われた近代に時代を絞り、東アジアの一国のみならず、日本と中国という地域を設定する。近代における新聞を一次資料とし、その中に描かれた様々なコーヒー関連の報道を対象に調査及び考察を展開していく。時間軸に沿って普及プロセスを明確化した上で、日中においてどのように変容しつつ、普及されたのか、コーヒー文化が日中における発展初期の様相を明らかにしたい。その上で、両国のコーヒー文化の表象を比較しつつ、日中における西洋文化への認識の類似性と相違性を明らかにすることが、本研究の目的である。

**【研究方法】：**

日中の新聞の中から、調査対象を特定の新聞紙に絞り、それぞれの新聞紙のコーヒー関連報道をデータベース化する。その新聞の発行日という時間軸にそって、量的な調査の結果を行うことにより、報道量の変化を把握し、その上で、綿密な紙面分析を行う。その上で、関連する二次資料を参照しつつ、テキスト分析を行い、近代の日中コーヒー文化の受容、発展、普及状況の類似性と相違性を試論していく。調査対象は、日本側の『読売新聞』、『朝日新聞』、中国側の『申報』を取り上げる。調査対象期間は、『読売新聞』は創刊の1874年から1945年まで、『朝日新聞』は創刊の1879年から1945年まで、『申報』は創刊の1872年から1945年までである。1945年以降は、日本は戦後期に入り、中国では国内戦争が勃発したという特別な時期であったため、本研究では取り扱わない。

以上